

## [レポート1]

## アートと地域づくり

大地の芸術祭  
越後妻有アートトリエンナーレ2000

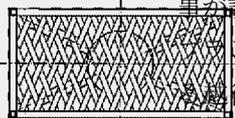
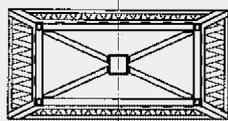
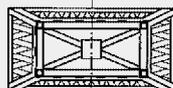
昨夏、53日間にわたって新潟県越後妻有地方で大規模な芸術祭「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」が開催され、十日町市を中心とする6市町村を舞台に32カ国142人のアーティストによる作品が設置され、これらの作品を一目見ようと、多くの人々がこの地を訪れました。今まで名前すら知られていなかった越後妻有地域は、一躍、日本のみならず、世界からも注目を集め、またマスコミの関心度も非常に高いものでした。

アート、広域連携、地域づくり、過疎対策、都市と農村の交流など、この取り組みには多くの学ぶべき点が見受けられます。大イベントを終えた越後妻有地域と、この取り組みの総合ディレクターを務めた北川フラム氏を訪ねました。

## 蒸し暑い夏に16万人が越後の農村へ

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」は、新潟県南部にある十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町の1市4町1村が協働して進めている地域振興プロジェクト「越後妻有アートネックレス整備事業」の一環として位置付けられたイベントです。6市町村の総面積は約762km<sup>2</sup>、人口約8万人。夏はむし暑く、冬は日本有数の豪雪地帯という厳しい気候条件とともに、農業政策の転換や絹織物産業の衰退など、基盤産業の環境変化のなかで、産業転換が円滑に進まずに急激な過疎と高齢化の波にさらされ、その状況はすでにいきつくところに来ていたという状況の地域です。

新潟県では、'92年に日本銀行出身の平山征夫知事が誕生し、就任一期目に広域活性化プラン「里創生プラン」を提唱、この十日町地域広域市町村圏である越後妻有地域は、'94年にその第一号の地域指定を受けていました。その後、十日町地域では、里創生プラン策定協議会を設立し、まちづくりシンポジウムなどを開催、'96年に越後妻有アートネックレス整備構想を樹立し、その活路をアートに見いだすことにしたのです。芸術祭開催までには、地域の魅力を再発見する写真と言葉のコンテスト「越後妻有8万人のステキ発見」や、花を使って広域をつなぐ交流ネットワーク「花の道」、各地域の特性を生かした空間づくりを世界の建築家、アーティストとともに作り出す「ステージづくり」などに取り組み、これらの成果を発表する場として3年に一度開催されるトリエンナーレ形式で芸術祭を開催することとしたのです。第1回となった去年は、地域と自然、それに包まれている人の生のあり方を見つめ直すという意味で「人間は自然に内包される」をテーマに、7月20日から9月10日まで53日間の会期で開催されました。32カ国、142人のアーティストが参加、約13万人の作品鑑賞者がこの地域を訪れたほか、会期に合わせてセミナーやシンポジウム、コンサートなど大小さまざまなイベントが開催され、イベント参加者は3万人を超え、合計約16万の人々が越後妻有





地域を訪れたこととなります。

出展された作品は、6市町村に点在して設置され、美しい棚田を背景に5つの彫刻と5つの文字を配置し、まるで1枚の絵のように見せるイリヤ&エミリア・カバコフ（ロシア）の「米の実る里山の5つの彫刻」（松代町）、宿泊施設でもあり光を感じ取るさまざまな仕掛けがなされたジェームズ・タレル（アメリカ）の「光の館」（川西町）、かつての信濃川の流れて約600本の杭を立てた磯辺行久の「川はどこにいった」（中里村）など、数え上げていたらきりがありません。作品制作過程では、地域住民が参加する仕掛けづくりをしたものも多く、中里村で地域の人々から寄せ集めた衣服を畑の上に吊り下げたクリスチャン・ボルタンスキー（フランス）の「リネン」（中里村）は、その制作過程がテレビで取り上げられました。作品のなかには永久設置のものもあり、それらは会期後も見学することができます。

## 強力な総合ディレクター・ 北川フラム氏との出会い

高齢化率が30%に迫るといふ越後妻有地域。しかし、新潟県が推進する里創プラン指定地域であるという県の大きなバックアップとともに、'96年には十日町市には高原リゾート施設がオープン、'97年には越後湯沢とこの地域を結ぶ第3セクターの鉄道・ほくほく線が開通するなど、いくつかの変化の兆しが見られ、この取り組みにもはずみをつけました。そして何よりもこの取り組みの大きな原動力となったのは、総合ディレクターを務めた北川フラム氏との出会いでした。東京・立川市でパブリックアートを取り入れた再開発事業「ファーレ立川」を手がけた実績のある北川氏は新潟県上越市出身。北川氏との出会いによって、すでに地元で検討していた棚田や火焰土器など地域の文化の継承を、アートと結び付けていくことを決定したのです。なかでも現代アートは作品の現場性を大切にすることから、地域と一体となって作品を制作するという特徴があります。この点は、越後妻有特有の自然を背景に作品が出来上がることになり、その場に行かないと作品を

見ることができません。産業誘致や地場産業振興は厳しい状況であったこの地域にとって一つの方向でもあった、交流人口を増やすという点でも、現代アートの現場性は生きてきます。しかし、「現代アートと地域がどう結び付くのか。この地域のなかでどのようなアートが展開されるのか」ということは、正直、誰もわからなかった」（十日町地域広域事務組合事務局企画振興課・押木主査）状況で、それは地域住民も同じでした。このため、地域の理解を得るため、北川氏は準備期間も含めて「5年間で2,000回近い数の住民説明会、自治体の会議に出席」し、総合ディレクターが自ら、住民説得のプロセスに積極的にかかわりました。企画、コーディネート、普及啓発活動、調整まで、幅広くかかわり、一手にその責任を受け止めた北川氏の役割が、非常に大きいことは、誰もが認めるところです。

## 「大地の芸術祭」の挑戦

越後妻有アートネットワーク整備事業は、国の地域戦略プラン地区、次世代の地域づくりモデル的实践地区などの指定を受け、また里創プラン指定地域として県とともに実施している広域連携事業です。このため、大地の芸術祭に合わせて、道路改良や河川整備など、インフラ整備が優先的に進みました。いくつかの作品制作は、これらの公共事業を有効に活用、連携しながら進められました。これは、先に述べた「ステージづくり」のなかで、道路改修や施設建設の際にアーティストや建築家がかかわったもので、ハードなモノづくりのなかに、アートの視点を盛り込みながら、できる限りソフトとの連携を図っていこうという挑戦です。実際、平成10～12年度におけるアートネットワーク整備事業は、ステキ発見、花の道、大地の芸術祭のソフト事業予算で3億6,240万円ですが、このほかにハード事業としてステージ整備を行い、こちらは10億3,100万円の予算のなかで、公共事業と一体となった作品を取り込むようにして、公共事業とうまくドッキングしながら作品づくりが行われたのです。こうした作品を発表する場が3年に一度のトリエンナーレであり、発表の場を

## Report. ①

設けることで、注目度が高まり、地域の公共事業に対しても新しい意味付けをしたように思われます。また、公共事業に対する人々の意識も今までとは変わってくるきっかけになるようにも思えます。

大地の芸術祭のなかでは、もう一つ新しい挑戦といえる組織があります。芸術祭の運営に大きな力を発揮したボランティアグループ「こへび隊」です。こへび隊は、主に首都圏の美術や建築関係の学生を中心に、'99年12月に結成され、その後、口コミで参加者がどんどん増え、最終的には10歳代から70歳代まで約800人が登録しています。作品制作の補助、外国人アーティストの通訳、アテンド、会期中の運営と事務局運営、ホームページ作成や広報活動など、さまざまな局面で主体的にかかわっており、のちに「ボランティアではなく主体的なサポーター」と主張しています。もともとは北川氏が「長期的にやろうとしたら、若い人たちと一緒にやっていくしかない」と発案したもので、当初は地域の人たちに受け入れられてもらえず、苦勞もあったようです。しかし、その後の成長ぶりは目を見張るものがあり、事務局スタッフも「あれほど成長するとは」と驚きの様子でした。メンバーの多くが首都圏中心の学生であり、これだけ多くの都市の若者が過疎の農村に関心を持ち、集まってきたという意味は大きいと思います。すでに、こへび隊は3年後に向けて独自の動きを見せており、今後こへび隊が地域を動かす大きな力になっていくようなパワーが感じられます。

## 広域連携での取り組み

いくつかの市町村が一緒になって事業を進めるといふ広域での取り組みは、とかくそれぞれのまちのエゴが出て、うまく進まないことがよく見受けられます。実際、この越後妻有地域でも、足並みのそろわないことや各市町村での問題は見られたようです。しかし、'97年に3年間継続での事業費が決定されたことで、とにかくやってみようという姿勢を6市町村とも貫き通し、昨年開催に至っています。また今回のような広域連携での取り組みの成功の要因には、県のバックアップとともに外部協力者の存

在があります。6つの市町村を束ねる上で、総合ディレクター・北川氏の存在は非常に大きなものでした。多くの著名なアーティストたちがこの芸術祭に参画してくれたのも、北川氏の人脈によるところが大きいのですが、それだけでなく北川氏が全体像をしっかりと描きながらも、6市町村の住民説明会をはじめさまざまな会議にできる限り参加し、地域の意向を聞きながら理解を得るといふ地道な取り組みを怠りせず、大変な労力をかけた結果が広域での取り組みを前進させたといえます。また各市町村間との調整では一種のクッションのような役割もあったように思います。

どんな形であれ、動き出した広域連携での図式は、大きな成果ではないでしょうか。実際、この地域と一緒に里創プランの地域指定を受けた他の5圏域では、まだ具体的に事業は動き出していないと言います。先進性の面でも地域にとって誇りをもてる足跡を残したことは確かです。

## 3年後に向かって

大地の芸術祭の開催は、交流人口の増加、住民参加と交流の活発化、商業・観光業の活性化、越後妻有地域の知名度アップ、インフラ整備・公共事業の導入、国際化、地域への誇りの醸成など、さまざまな成果をもたらしました。経済波及効果のみならず、新聞、テレビ、雑誌等のパブリシティも相当なものでした。しかし、それと同時に作品展示の分散、運行したシャトルバスの便数や乗り継ぎの不便さ、道路案内の不足、住民の理解と参加の格差、次回の事業規模の検討など、総括報告書には反省点や課題も列記されています。しかし、これだけ注目を集め、なおかつ地域と自然、公共事業のあり方、都市と農村の交流、そして広域連携など、多くのことを考えさせられた取り組みは、かつてなかったように思います。

3年後のアートトリエンナーレが、どんな波紋を投げかけてくれるのか。今後が楽しみな取り組みです。

# Report. ①

## インタビュー interview



株式会社アートフロントギャラリー代表取締役

## 北川 フラム氏

● Kitagawa Fram

—北川さんが越後妻有にかかわったきっかけは？

▶北川：平山知事が就任したときに里創プランという広域圏での取り組みがスタートして、私は新潟県出身ということもあって、委員会のメンバーになりました。当初6圏域で動きが見られて、そのなかの十日町を中心とする越後妻有地域は、もっとも難しい地域だと言われていました。一時は稲作で日本を支えたような地域だったのに、今はひどい過疎に高齢化。社会資本も残っていないし、昔のしがらみが強く残っていたからです。そんなところに私のような人間がかかわることになったのは、一か八かの賭けだったように思います。私はもともと実践主義ですから何かやってみたかったし、最も難しい地域だからこそやってみようという思いもありました。

この取り組みにアートを持ち込んだ意義は三つあります。一つは、'50年代にA.ウォーホールが登場して、大量消費型のイメージの氾濫がありました。このときに美術は力を失い、もうやることはないという風潮になったのです。しかし、その後も隅々の方でマイナーに活動してきたアーティストがいて、地球環境問題や都市問題、グローバルスタンダードなどに対して、ささやかなアーティストの主張をしてきたわけです。越後妻有流に言うところ「アーティストは発見する」存在なのです。今までアートの分野では、アルゼンチンの美術館でも、東京の美術

館でも、作品はどこへ持っていっても展示可能で、均質な美術空間をつくってきていました。ところが最近アーティストが均質の場から固有の場に向かっている傾向があります。これは、金融や通信のグローバル化が進むなかで、その場特有の問題にどう対処していくかというアーティストなりの答えを意味しているのだと思います。アーティストが場に入ると「場の力を探す」「発見する」ことができるのです。

二つ目に市民概念醸成の効果があります。アーティストは作品を作る前に、いろいろなことをその場で学びます。他人のまちに入るわけですから、住民に理解を得なければなりません。そこでは共同作業もありますし、地域の材料を使うこともあります。そのような他者と他者が重なり合うことに対する訓練は、今まで日本のなかで欠落していたもので、それが市民概念の醸成です。分かりやすくいえば、刺激を受けたことで生まれてくるものがあり、それは非常に重要なことなのです。

三つめは、交流人口が増えることです。現代アートは、その場に行かないと本当の良さが分からないもので、人を呼ぶ力があるのです。

実はこのほかにも一つ、四つ目の役割があります。アートは、一般的には意味のないもので、分かりにくくて、地域おこしに資するとは思えないわけです。だからこそ、そこで起きてくる反動は、すごいエネルギーになります。正直、この企画を発表した後は、大変な叩かれようでした。議会だって大反対。つまり異常な反対活動がまちを耕すきっかけになるのです。これがアートの持つ非常に大きな力です。実際に、アートという訳の分からないことをなぜやるのかという議論から始まり、地域問題や公共事業のことなど、地元でいろいろな論議が行われました。アートにはそんな作用があるからアートを持ち込んだまちづくりにこだわったのです。

—結果的に、約16万人の来訪客がありましたね。

▶北川：アートやパブリシティの力もありますが、もっとも大きかったのは口コミです。噂が噂を呼んで、ぐんぐん広がりました。あの地域の夏は、暑くて湿度が高い、一番嫌な時期です。それを6市町村に散在した作品を探して、案内もよくないところを回ったわけです。でも、「大変だったけど見終わっ

た後に、嫌な感じはしない」という評価がほとんどです。きっかけはアートでしたが、実はあの圧倒的な自然に魅了されたのでしょう。今まで人間が手をかけた里山の自然というものを目の当たりにしたことがなかったのです。北海道のようなそのままの自然は知っているでしょうが、棚田のような地形はあまり知らないのです。あのような自然と人間とのかわり方を見て、その素晴らしさに引きつけられたのでしょう。最終的にアーティストは、地域の自然という本物の宝を見せし、それを発見したのだと思います。20世紀の美術は都市から生まれた美術ですが、今、都市は病んでいます。アーティストの活動の場が、都市以外にもあったことは非常に新鮮だったのでしょう。だから外国でも大きな評判を呼んでいるのです。

あれだけ各国のアーティストが参画してくれた大きな要因は、越後妻有の地域問題について、世界のアーティストが問題意識を共有できたということでしょう。私もこの取り組みでいくつかの発見がありました。人間が手をかけた自然や、自然とのかわり方において、農業の持つ意味は非常に重要であるということ。地球環境問題や都市問題などを考えていく上で、もう一度中山間地や田舎と言われているところを見直されなければいけないということ。今後はその地域がどのように生きていくかが大きな問題ですが、農業は非常に重要なキーワードだと感じました。今回は「人間は自然に内包される」というテーマを掲げていますが、将来を考えると、その地域だけでは成立しないことは明らかです。例えば金融資本のグローバル化に対して、経済的にどうつながっていくのか。今後の展望をしっかりとっていないと、本当の意味で地域に責任をもってかわることにならないと感じています。

この地域には、若者がほとんどいないので、専門家のほかにこへび隊というサポート隊を組織しました。支援者とプロがかかわって地域をつくっていくことが重要だと思ったからです。海をきれいにするには山に木を植えるように、地域が一つの地域だけで成立することは無理です。今後はネットワーク型社会が求められてきます。この取り組みが本当に動き出せると確信したときに、若い人たちにバトンタッチしていけるような仕組みを作ろうと考えました。機能的にやろうとしたら、これはあまりいい仕組みではありませんが、長期的に考えると、若い人

たちと一緒にやっていく以外に道はありません。いろいろな人たちがかわるようであれば、地域はだめです。世代や立場が違う人が集まって取り組んでいくことは非常に重要です。

——住民説明会や会議にも参画されていますね。

▶北川：私は最終的には、あの地域の200ほどある集落すべてにかかわりたいと思っています。もし自分がその出身であればと考えてみてください。これはとてもこだわっています。公共事業の問題もあります。このような地域では公共事業は最大の産業で、公共事業なしに生きてはいけません。公共事業は麻薬ですが、瞬間的な点滴でもあります。今、公共事業がストップすれば、地域は立ち行かなくなります。ですから麻薬であって点滴でもある公共事業を、可能な範囲でソフトな事業にやわらかく切り替えていく方法がいかにあるかということにも挑戦しているわけです。

やり残したことはたくさんありますが、最初の出発点としてはよい結果になったと思っています。

——最後に北海道にメッセージを。

▶北川：北海道は大好きです。人も好きだし、本物の場の力を持っています。例えば釧路には、海があるし、釧路湿原もある。可能性の高い地域です。原始の自然と都市が同居しているのですから、それを生かすようなことができないかと思います。北海道は、それぞれの市町村に、応援団をつくるのが大切です。外部とのかわり方で元気がつくことがありますから、それはとても重要な気がします。特に北海道の人は外部の人間に対する拒否感がありませんから、この財産を大切に、それをきっかけに北海道の応援団ができるといいと思います。

#### 聞き手

釧路公立大学教授・地域経済研究センター長 小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

#### PROFILE プロフィール

(株)アートフロントギャラリー代表取締役

#### 北川 フラム (きたがわ ふらむ)

新潟県生まれ。(株)アートフロントギャラリー代表取締役。同社は、都市計画・まちづくりのアートプロデュース、ランドスケープ計画における環境デザインを中心に、美術品の販売・コーディネート、芸術文化関連のイベント等の企画運営など、美術全般にかかわる業務を展開。'94年に竣工した東京・立川市の「ファーレ立川」ではアートプランナーを務めており、昨年の大地の芸術祭とともに、その取り組みは、常に美術界や建築界で注目を集めている。